へ 5
6669

藹若の角もさえし嬋娟

細き飛泉の流れに差あるる姫

力丈[illegible]翼に孱刈

[illegible]

へ5
6669

<2002-197>

茶俗しく西き佛のおもかげ

夕日や芦(アシ)の世さる浦の潮(うしほ)

一 萩さくみけり不興(フキヤウ)気(ギ)の面る君られ

一 鳰(ニヲ)の巣(ス)に知らるゝ輕(カルキ)き浮世かな

一 江の松も千(チ)り行く露なく夜の月

一 山の端(ハ)も月は隠れて水鶏(クイナ)かな

一 夕涼や鶏(トリ)も朝(アサル)るに床(トコ)の宿

一 有明り残山もよその郭公

鶴の今や[illegible]ハ[illegible]の[illegible]

猿狩や世帯の埋りハ残る月

[illegible]ほと[illegible]蓑[illegible]

[illegible]ちり[illegible]様(ツギ)木の[illegible]

覚(サメ)て[illegible]廊の[illegible]や時雨

風[illegible]も捨て涼しや草の庵(イホリ)

[illegible]中海の様[illegible]

[illegible]の[illegible]つ[illegible]

五月雨の晴間待や星月夜

松風や子戦(ソヨリ)もせぬ夏の夜

水鶏鳴しと人のいふや山の小橋

撫子の山は葉隠の形に見る月夜かな

すゞ月の涼しき宵(ヨイ)之青簾(スダレ)

涼しさや清風運ふ須佐(スサ)の浦

涼んや田植仕舞ふ跡の雨

涼しさや松の露生雨後の月

一 松か枝に掛り半はの夜の月

穐の夜や海にやとかる仕舞舟

草むらの露の秋の雨や時雨

影溜の水遣をき青すゝき

二丁 小滴

一 五月雨に流れ寄たり沖の島

田一枚隔（ヘダテ）て涼しや夜の雨

郭公〻川飛こゑ杉の月の影

降る雨を幾筋見とる

蝸牛

神楽の幟は中に振りなり

一 烏もしの那須野かり 一とせ川霧

一 花のは遊ひて 詠る人 桂の井

一 若菜のみ日の草に摘や 春の庭

一 構へ奉らり 剣は身に添う

一 春の時の浪[illegible] 蓮の浮葉に

蕨の小萩の 根摘むたる 大根

一 月はその旅人なる 作ゆ人

貞節の今も昔も猶あるか

山々も青葉に暗き五月かな

松風や雨の匂ひ皐月かな

時鳥しきりて雨の降る五月かな

雨後も見る坂の涼しき哉

霞(モヤ)深に錦の藤浪や春の杜

行春を追ふて出るや時鳥

耳も風も聴く居所の忍び哉

形身の庭ほしかゝる足月哉

書楼御一人は出た風呂なる哉

二丁 芳秋

綾秋の[illegible]の露に暁種

春の床に[illegible]ゆかしき宿なき

秋風や浦の靜かな夏のくれ

[illegible]に[illegible]ハ足ハ和哥

花[illegible]雨に[illegible]秋の形

窓(マド)洩(ハモル)や更く[illegible]梅のくれ

辷り来る帯の光りや夜の雲

摩耶の影や干潟うつりし走り松

一 水音の咲つゝ湖は半百里

菜の花や肌(ハダ)庭(ユロ)に霞の薪(コヒル)

一 奥嵯峨の小田の川や夜の月

一 雨蛙の葉を揺らし明月だ

一 風宮を押つくして雲の峰

蝸牛や花を揃へ添削の灯明り

よしや 梅雅

猿曳や柳翠の草鞋を拋えん　立

瑞垣に冠着るの春の寺かな

雲の中深き峠の巳月かな　麗雲

渓の瀬の浪の流しや桜の竹

涼しさもお流れも要しも春の夜

冬も晴待ち星影の夜

秋の夜は嶋の夜

爲書は日の降り雨

一 山鳥の声も[illegible] 夜半かな

一 葉隠に茶摘の実のこる月[illegible]

一 [illegible]鶴[illegible]雲の句や刈萱浦

秋の夜の空より[illegible]湖の[illegible]

一 戸ざして扉めくる[illegible]家の月

一 梅が香の露しけりや[illegible]

一 清[illegible]の水月[illegible]

[illegible]

七ノ 一有

七ノ 山月

一 上戸の静かに清しきの葉
村中の山も雲行雨ともる
一 大根のお礼に咲て名月かな
鴫山に風も人や宵の月

一 篠竹の煮(チユメリ)もしはむかな
一 灯をともして涼しき石鐙に移
一 漁火(イサリビ)やもの晩霜深き草月かな
一 念(子ムノ)仏の音 凋(シボム)とは待るとも思はず

是一ツ清水[illegible]見[illegible]

賤か家[illegible]利[illegible]屋[illegible]枝[illegible]

霄月[illegible]桂[illegible]郭公

一 梅[illegible]如[illegible]人[illegible]春祥[illegible]

一 第[illegible]藤[illegible]

申[illegible]風[illegible]葉[illegible]足[illegible]

味[illegible]入[illegible]一上根[illegible]

一 花[illegible]雲[illegible]静[illegible]

頃再の襖(フスマ)[illegible](ノケ)ゆるや 夏ん

樋満る人の清し 不二續(モヨテ)

一 暮水ハすゝ雲立る 梅の雨

君舒も花の流るゝ涼往[illegible]

一 蓮まて山戚て也 庭の花

一 水よりて飛黄經を越して

一 風の香も流ゝ送る世に 細の扇

一 安ゝ野ゝ中ゝ 長て 眺[illegible]

夜中迄子供あり若木の音こそれ

雪下や茶のますまれぬ呉竹庭

常に気の紺かるゝ也百日紅

夜渡や寒い茶の湯婦女の霜

桂山

時好引神事なる庭や鶴の梅

夏衣身の中嫌は世する滝茶り

振り出し好みの藤まぬき入て今年木

海あれ好みの舞酒への也今鏡の色

都月

岩根のうち堀難勝不之清

月後くさ君にむかむ雪の下

漲節の泮[illegible]雲の手紙哉

門外の鐘[illegible]このは[illegible]もまた哉

一 旅鶴帰羽も志もくの渾の[illegible]

一 鶯は梅の園見つるや佛哉

一 空の羽の豌[illegible]泳 林の奥

雪[illegible]の[illegible]及[illegible]蔵[illegible]

笠[illegible]ふくれ[illegible]も[illegible]迹[illegible]

[illegible]も[illegible]を[illegible]蓮の露[illegible]

大[illegible]狂[illegible]風の雫[illegible]

凡[illegible]の[illegible]に[illegible]

[illegible]

菅の[illegible]を[illegible]雲[illegible]

川原に宿[illegible]をか[illegible]扇[illegible]

湊の[illegible]中海や[illegible]子

梅の[illegible]書[illegible]の月

夜[illegible]ゝ[illegible]時鳥
[illegible]の[illegible]暁
[illegible]けも[illegible]人と[illegible]
[illegible]の[illegible]

[illegible]ゝ[illegible]
[illegible]ゝ端[illegible]のゝ
水[illegible]ゝ[illegible]
[illegible]

一 萩芦や さゝ波風の川瀬哉

一 ひとつや 業平卿の塚

若草の庭の君樹て深山鹿し

一 涼しさや月に作りし庵かな

名立の世中に涯に海也

雷の音何とて河の下の末

舟花く春の水をも呼れ

松の声風呼て月ふる山

見物所ハ土器投ケ捨

一 深川ハ洲崎ニ鐘ヶ淵汐干

一 滝の川ハ紅葉を見物ニ日暮ハ

一 墨田川ハ涼船花見

八ツ小路

一 梅ハ亀戸ハ躑躅ハ大久保ハ

躑躅ハ小川のさくらハ萩

一 名所ハ鎌倉七里の形浜

江ノ嶋ハ御写本

金持まてものも人をも
悟らくハ往生の後香の郡
済ハや御らんにハ窓の外
好和の郡にさえ満すの成

君かたちを神も見れハ依取
多立の日ハしほかき草の色
津の宿にし道ハ見えぬ国の年
平[illegible]と見ハ[illegible]渇入り

瑞ゝ冠華寄るめくらし

一ちられし水の汐なれ郭公

免まもて中小乱く雁の那

一杖ぬきき泊小息秋もやり乗草

海をつゝ廟友の本立か

温泉のあまり宿に明し山清き

一月影に夢をゆく夜る錦なれ

晴空ゝし 水空の山はなれ

ましくも年のうちにや庚申かな
一 浪よせて浮(?)や浦の家
春も桜の香に東風[illegible]かな
一 年も霞に空て月の影新春かな

雲の上なるかすみを清
清水寺くれ仏も暑[illegible]
比叡の山返り波の湖
宮桜の花の[illegible]山[illegible]かな

一 にほひの事御心得へく候
子々孫々末代まても無相違知れ候へ
一 此度於我等は伝授仕候
一 右条々は我等の存知候事

竹翁（花押）

一 両方手順之仕様は何も伝候
屋子まで心の秘伝にて候
惜なく存候まゝ貴殿へ伝候
一 習は山小口のまくら両方や同じ事に候

一 能因の[illegible]こそ[illegible]の[illegible]
[illegible]紙の[illegible]遠[illegible]夜の[illegible]
[illegible]の[illegible]
一 [illegible]の[illegible]

[illegible]や[illegible]能の[illegible]
[illegible]走る[illegible]
[illegible]田の人[illegible]
[illegible]

山の井や清き松かけ清水かな
一 上ツ毛川の さゝやき和尚
髭も茶の新婦にまさる 寧月かな
一 嫂も衣の着替る花のしかな

浮雲消たる梅にさへ時鳥
一 思ふまゝ風の音もや芳の露の哉
一 城の佐も暖情を見る月夜かな
一 若桜の花見の水の下の秋のあはれ

梅に雪しく柳に雨や昔かな

庭の面に見ゆる此の付て見ゆる花

涼しさや行く先々蕎麦の節分哉

国風に淀に横日見え鐵や夜の雨

橋の下行く月の流しさへ今の雨

涼しさや中に碗（コボレ）走る水の上

川端や細く地中の流

坂の花や人の見えて鳥庇（ヒサシ）

賀

題

小庭も池をほりしや夜の月

翁之塚に舩の者やみ云詣

水引のさきや種の濃紅

雁ゟ後や咲遅く野菊かな

お花

青きしや晴て見ゆる網代に

蜻蛉も秋さく鳴て枯野哉

家之露鹿聲に見へける松の蟬

東海しよ不二の嶺しく夜の月

一君を待鞠ある須の人山路かな
何事も世の中風の秋なれや
為も千々柳も五月村雨の春の庭
子もあやめ青山よりも足の紋

一夢ぞ深山に鶴鶯や芦の風
飯見ても身くしろ見えて林の中
あの世の月香よ雪の里時雨の片隅
吉田のよ深きも春雨月の早橋渡る

店かゝる妻のたゝ出峰かな

一 深ふ音こゝ御座の新あやめ　花見

一 水定には まくらおもふ松浦

一 秋霜に影すます中の菊の秋

芦に鳴る声の宿ゝ秋の夜

穂にさして国の宝や豊なる

一 菊の露流れし後に余り風

一 水清し満の波に鶴川の秋

一 月ノ鏡や日本のまゝ知る 究見庵

一 寝屋にまきまき 涼しさの月 雅月

明月に心も置く 静の庵

手をも引く月に傍らへ [illegible]

一 天地の高きも世は蓮は表の秋

一 籠に浮世の雨を重ねての

一 涼しさの何や静にあけては

一 行灯に人の影ぞ涼しかり

涼しさや[illegible]雲の峰

門先の[illegible]雲の峰

暑さにもまれ[illegible]の梅の雨

菊の[illegible]や大矢数

寝ても見ても[illegible]蝶の花

澤の葉の[illegible]暑さの峰

戸口迄朝の[illegible]涼しさの峰

打水の[illegible]山の峰

羅月

皐月雨や洲に涼しき前々前

雨柿やいく古き蝸牛の溺れたる也

鄙なる庭中に河蟀のなかり

日和山よりしおなかに暖気なり

雛諸荷のかびと解くや雲飛

去年よりこの春の人や春の空

風銭くも草やや行しし子

永代深川風の動きかり

堀に一すち霜のたまりや浪の根をかし

楼住僧田に蓄ける蕪を生

子を思ふ鹿の声にまつ生けり玉郎

一 上簾に風の吹入る書見かな

一 時雨のあとや夜中秋の暮

暑中に腕まくりあり蚊の鶴

一 出雲の守の森の茂りや郭公

植物の蕾の中にほのめく

川舟に都しまるも山の風かな

葺茅新にしき道まれ五月かな

松風の味は床しや柏餅

比ふ毎にもる影深しや夜の色

葉柳にはるゝの滴も匂ひかな

鳥見野中にし浮れて花の影

毎夜とも隠るとてや親鶏

秋らしき日の朝きや郭公

一 鶯のまた済る飛ても鳴かれ

声いつく浦のそこや烏帽子哉

世は安し田には喜ぶ麦の秋

瀧淀みに泥を[illegible]

まけぬ形や宮影まで帰の雁

一 [illegible]池やや神[illegible]子

[illegible]の若葉や[illegible]郎

一 [illegible]を蝶[illegible]

みはけども端あとの緑や汗の玉

秋山し錦のまゝに高かさし

羅浮る新ゆ羅浮の蝉聲

こし　禾雲

羽織立て錦や書庵の花盛けり

三　全通

上見錦ハ何あまき世の画穂笠

一葉に響羽ぬ奇の龍しい

こし　圭石

石含淡や雨と出綿なる庭の土

秋奥の便りに車より一枝能

蓮の香や濯纓ふかく隠

石女の仏事しけや平家ゆ子

鳴ちらす山の響きや郭公

よし切や出水に蘆の村雨

蜉蝣や裡まで雨のうき隙

旁に来る哉織る郭公

涼さに句も急く蝸牛かな

神垣の中に田立なき年作

青柳に燕[illegible]り[illegible]の魚
初若子[illegible]まて[illegible]の花ならむ
水源の[illegible]すし[illegible]若[illegible]し
瀬に流れの[illegible]く[illegible]西[illegible]

見渡せは[illegible]
[illegible]中に[illegible]
咲[illegible]に深山[illegible]
晴てよき日の雨[illegible]宮[illegible]帰年

西下藤せは川よ夜中霰
鴨は流も陰は去り寺風
青月の姥まに昇るも堤まで
殺ぐ巡つむ子西江の小鍛冶

貞方

叡山鐵を力みも似や筆だ
為まへ咲く三日月ぬきも成りだ
維の火下墨染の夜今夜煙だ
見る迎えぬ此の深くや呉ます

星之

呼ば呼ぶの行や果なき

梅の切る雲や夜桜の速きゐ　萩子坊

行春や海鳥への波果り

力梅一ト日二夕日と濡る縁かな

蒔く神く月を緑る梅の雁かな

春朝きの潮も中さへ今年哉

高田ほしは城の夜の山

柳緑る草や静るの一と時り

冥雅

梅さくや関屋の附子の札
むかしにも常に花井の橋かな
あまかな文字も見えけり宮居かな
春雨を眺めはなしや花野かな

一 水汲て寄せ油ぬる木の下の庭
筆取て飛や和らぐ御幡丘
家々の團に揃へて見たいけ松の蝉
福の神の仏像里の堂や坂の中

平々山

冷水に浮梅の様をまことに見

一 雨雲の見えて峠の岩の那

実様やまことの花坂陀

春前の嫁に出も青の杖

一 常夜やかゝる雲の流かな

一 蔦の色や楓の様のまこと哉 文

一 徽雨と郷に渡り二日

琢しき春のみや 味る

蓮け年の細のき 涅し 陽明

一 母の山 いつれ 冰る 今夜の月

穂の花子 吹れ 雲 ともる 是也

川端の田 楼の 灯 家のまつり

帰人 題詩

松園書

つる山すゞみの木深みに
晴間何しぐれし

霞叢

戸もさして雁がねの秋も
あらし冬の月

一有

ゆかしや京の桂山
こほとゝぎす緒の
月足
梗
挺

賤しらんや
畳も小さき
孫ひとし
笑の

羅綾ゑ布子
はここちよし
ことしかな

禾雪

武さしの手綾所
あかね限る

春花

杉の切る〻雫や
夏艸の萬里句

蕗子 坊

秋

千とせし
紅の手流るゝ
刈りて流るゝ

松園

吾亦
紅よ
散れ葉流む女
かき流す女

松園

松園

園